

対馬の漂着ごみ AI解析

長崎大など研究成果公開

ドローン撮影 種類判別し色分け

長崎大などが参加する海ごみ削減プロジェクト「Debris watchers」のメンバーが、対馬市厳原町上槻の海岸で、小型無人機「ドローン」を飛ばし、上空で撮影した画像で、プラスチックごみなどを人工知能(AI)で解析する研究成果を報道陣に公開した。

プロジェクトは、長崎大と琉球大、ドローンやAIなどの開発を手がける六つの企業で構成。人工衛星やドローン、海岸に設置した定点観測装置からのデータを組み合わせ、漂着ごみの状況を診断するシステム構築を目指している。一連の取り組みは、日本財団などが推進するプロジェクト

「I-K-K-A-K-U」にも採択された。

メンバーらは7月31日、上槻地区の公民館で記者会見を開き、研究状況を説明した。

4月と7月に上槻海岸の上空から撮影した画像をAIが解析した結果、発泡スチロールや漁業ブイ、流木などの種類を判別して色分

けすることに成功したという。この技術により、ごみの推定面積の割り出しが短時間でできるようになるほか、回収できるかどうかの

判断などにも生かせるとしている。プロジェクトメンバーで自律制御システム研究所(東京)の井上翔介ディレクターは「日本だけでなく、東南アジアでも使えるシステムにしていきたい」と話した。



海ごみの上を飛ぶドローン